

山の百の花

講師 佐藤 マキ子

【95】マンサク

春、もつとも早く花をつけることから、まんざ咲く＝まんざくとなつた。また、枝いっぱいには花をつけるので豊作の意味の満作からきたとか、いわれているようです。

マンサク科の低木で葉の出る前に四個の紫色のガク片に四個の黄色の線状の花弁が波うったように反りかえって咲く。花卉の基部が赤いニシキマンサク、日本海側には、マルバマンサクが自生している。

一昨年の残雪期に会津の渋いヤブ山神籠ヶ岳の縦走に挑んだことがあつた。旧会津西街道の中山峠手前から高倉山へ向かつて急登の尾根を登りはじめたが、地球温暖化の影響もあつてか、積雪も例年より少なくおまけにザクザクのザラメ状、三步登つて二歩下るような状況で予定の行程を消化できず、高倉山頂から一時間程の尾根上にテントを張り、早々に就寝、翌朝は前日と打つて変わってミゾレの中でのテント撤収となつた。

縦走は持ち越しとし、茂岨沢の南の尾根

を下ることとしたが、緩んだ雪はワカンも効かず何度も滑つて転んで疲労困憊、尻もちをついて溜息まじりで見上げた空に、黄色いマンサクの花が広がっていた。そこで一本立てたのはいうまでもありません。



【96】サラサドウダン

安達太良連峰、和尚山南麓、石筵川左岸、標高千メートルの赤木平にサラサドウダンの大群落があつた。

あつたというのは、もう何年もその地を訪れていない。しかし、今も山でサラサドウダンを見る毎に思い出すのである。

地元の人に連れられて山菜取りに入った赤木平で、霧の中で静かに佇む木々の枝先に、紅色の鈴が無数にぶら下がっている様に息をのんだ。秋には紅葉を愛でながらの

キノコ狩りへと、その後何度も赤木平へ登つた。

ある年、樹高三メートルは悠に越す大木に根まわしがしてあるのを見てびっくり、都会に売られて行くのだ。でもどうやって下界へ運ぶのかと不思議に思っていた。

それ以来、赤木平へは行っていない。今も残つた数本が、あの可憐な紅い花を咲かせているのだろうか。

ドウダンツツジはツツジ科の落葉低木で庭木として愛され、花は黄白色の壺形、満天星の字が充てられ、別名フウリンツツジともいうとか。一方、サラサドウダンの花は黄緑色地に紅線が入り鐘形で花冠は五つに裂けている。ドウダンとは灯台の意で、分枝の様が、昔、宮中で用いた灯台の脚に似ていたこと、またサラサは更紗で紅白うち交わっている様からつけられてとか。

